

〒223 横浜市港北区箕輪町3-3-1 トマ喰い虫社分室

湾岸戦争週報

もう一つの目

No. 2

91. 2. 22

責任編集：梅林宏道

発行：トマ喰い虫社

¥100

連絡先：電話 045-563-5101

FAX 045-563-9907

ペルシャ湾と朝鮮半島

「冷戦終結」という第二次世界大戦後最大の歴史的転換点が、湾岸戦争に耳目を奪われているうちに、いつのまにか忘れられようとしているかに見える。

しかし一方、湾岸戦争のさまざまな場面で、冷戦の終結の意味に強く心を打たれがある。

1月25日、米国と韓国の国防省は湾岸戦争の最中であるにもかかわらず、例年の米韓合同軍事演習を今年も実行すると発表した。規模は昨年の30%減の14万人、主要演習期間は三月中旬であり昨年より4日短い10日間継続する。昨年、同様な日程設定による演習が行なわれたが、その際1月下旬から、演習に向けた実質的な部隊や物資の移動が始まった。したがって、今年も朝鮮半島ではすでに準戦争状態に入っていると考えられる。事実、朝鮮中央通信は、米第7空軍と韓国空

軍が2月4日には延べ560機の空爆演習を行なったと報じている。

米軍は、湾岸と朝鮮半島で同時戦争のシナリオをいたどっている。

この構図は、つい三年前まで悪夢のように描かれていた世界戦争の第一段階の構図である。1984年にニューヨーク・タイムズが暴露したペンタゴン文書は、「世界同時多発報復」のシナリオを明らかにした。ペルシャ湾に米ソ紛争が始まった場合、米国は朝鮮半島やソ連沿海州に核を含む攻撃を加えるという、いわゆる「水平エスカレーション」のシナリオである。80年代冷戦の極がここにあった。

今日、表面的には同じペルシャ湾と朝鮮半島の同時戦争シナリオが進行している。それ自身戦慄すべき戦争である。しかし、背後に差し迫った米ソの全面対決の影がない。その歴史の流れの意味を、世界の市民がもう一度噛みしめる必要があるであろう。

在日米軍の動き

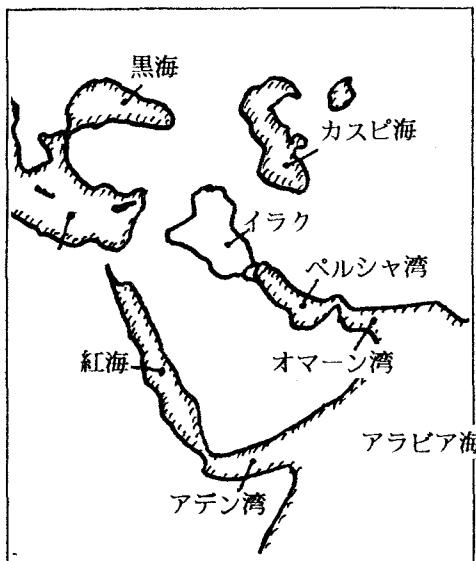
■戦闘部隊 3. 空母-2

ミッドウェー、イラク海軍を攻撃

空母ミッドウェーの湾岸戦争への参加と同艦の退役との関係については、前号で簡単に

触れた。ここでは、日本から湾岸に出動している最大の戦闘部隊である空母ミッドウェーの行動について述べる。

空母ミッドウェーは10月2日に横須賀を出航したが、乗組員には湾岸行きは知らされなかった。北海道沖において自衛隊との合同演習を行なったのち、10月12日、フィリピンのスビック基地に向かう途中に艦上で湾岸派遣が発表されたと報道されている（「スターズ・アンド・ストライプ」紙）。ホワ



イト・ハウスは10月14日に空母ミッドウェーが湾岸地域に向かっていることを確認した。

その時点では、空母ミッドウェーに随伴し、いわゆる「空母戦闘団」を組んでいると確認された船は、横須賀を母港とするトマホーク搭載の巡洋艦バンカーヒル、駆逐艦ファイフ、やはり横須賀を母港にするがトマホーク能力の無い駆逐艦オルデンドーフ、ミサイル・フリゲート艦カーツ、フィリピンのスビック基地を母港にするステレットの5隻と名前が特定されていない補給艦である。この補給艦は弾薬・ミサイル類の補給が出来るものであろうと推定されている。

11月1日、米国防省は空母ミッドウェー戦闘団がアラビア海北部に入ったことを確認した。その時、随伴艦の数は7隻と発表されている。かくして空母ミッドウェーは湾岸危機以来中東入りした4隻目の空母となった。11月7日には、前号で報告したようにトマホーク発射が確認された巡洋艦モービルベイ（母港は横須賀）がこれに加わった。

グリーンピースのレポートによると、11月末ごろミッドウェー空母戦闘団はオマーン湾で任務についていた（「ネイバー・タイムズ」）。1990年1月上旬まで基本的には

オマーン湾を中心に、時にペルシャ湾入りしながら作戦行動を取っていたと思われる。

その間のミッドウェーの任務は、①イラク軍の偵察、②奇襲対応と開戦準備を含めた攻撃・戦闘訓練、③海洋・空域封鎖の3点であった。

オーストラリア海軍、ミッドウェー戦闘団に加わる

オーストラリア海軍の軍艦が、ミッドウェー空母戦闘団に参加していることは注目に値する。当初ダーウィン（フリゲート艦）、アデレード（フリゲート艦）、サクセス（補給艦）の3艦が参戦したが、12月にはシドニー（フリゲート艦）、プリスベーン（駆逐艦）、ウェストラリア（補給艦）に交替した。形式上はオーストラリア軍の指揮下に留まっているが、現実は「米海軍の作戦管制」のもとにあると、オーストラリア政府も認めている。ミッドウェーが、しばしば横須賀からオーストラリアに寄港したり、リムパック環太平洋合同演習で米軍の演習を繰り返してきたことが、この参戦を可能ならしめている。日本の自衛隊が米軍と緊密に共同作戦演習を行なっていることの意味を、改めて考えてみたい。

開戦の時、ペルシャ湾に

1月17日の開戦の瞬間、6隻の米空母が湾岸地域にいた。紅海に空母アメリカ、サラトガ、ケネディ、ルーズベルトの4隻、ペルシャ湾に空母ミッドウェー、レンジャーの2隻、合計6隻である。しかし、ルーズベルトは全速力で紅海からペルシャ湾に移動し、それ以後ペルシャ湾で、行動している（「エーピエーション・ウィーク・アンド・スペース・テクノロジー」91年2月4日）。

ペルシャ湾にいるミッドウェーの主たる役割は、空母艦載機によるクウェートの港湾施設、滑走路、イラク軍進駐拠点の爆撃であった。開戦と同時にトマホークがイラク軍の対

空砲火基地を叩いたのに続いて、F/A 18 ホーネット、A 6 E イントルーダーなどの艦載機がこれらの爆撃を行なった。爆撃は昼夜を問わず行なわれた。厚木、岩国、三沢、横田などの日本の航空基地で繰り返されてきた夜間発着艦訓練（NLP）等の結果がここに具現された。基地近郊の住民に騒音で「地獄の苦しみ」を与えてきた同じ飛行機が、アラブの人々に「血を枯れさせる猛爆」を加えた。また、これらの攻撃機の低空飛行訓練は、長野県の伊那谷で行なわれてきた。

イラク軍のレーダー網を攪乱させたり、レーダー基地を攻撃する電子戦攻撃機 EA 6B プラウラーも重要な役割を果たした。ミッドウェーのプラウラーは、その電子戦低空飛行訓練を奈良県土津川の山間でひそかに行なっていた。

ミッドウェーの行動でもう一つ注目すべきことが記録されている。1月17日、開戦と同時に空母ミッドウェーとレンジャーのA 6 E イントルーダーが3隻のイラク海軍軍艦を沈没させた。何らかの上陸作戦がありうることに備えて、ソ連製オサ級高速ミサイル艇（射程40キロメートルのスティックス艦対艦ミサイルを搭載）がイラクのウムカスル港を出たところを、イントルーダーのハプーン巡航ミサイルが襲ったのである（「ネイバータイムズ」91年1月28日）。

イラク海軍は極めて小さなものであり（魚雷艇7隻、高速ミサイル艇6隻、掃海艇7隻）、この沈没でイラク海軍の15%が失われることになる。この作戦にミッドウェーとレンジャーが参加したことには深い意味があると思われる。この両艦とも米韓合同軍事演習において繰り返し上陸作戦演習を行なってきた。小さな海軍、大きな陸軍に対する上陸作戦に習熟してきた空母だと言ってもよい。両艦ともクウェート上陸作戦に最も重要な位置に配備されている。

ミグ23とホーネット

空母ミッドウェーの主力艦載機はF/A 18 ホーネットである。この航空機は戦闘機としてイラク空軍の戦闘機と空中戦を戦う能力と、攻撃機として地上目標を空爆する能力をもっている。どの空母に属するホーネットであるかは明らかでないが、次のようなエピソードが紹介されている。

「ある地上目標への攻撃指令を受けた艦載機ホーネットのパイロットは、イラクのミグ23が接近中であることを告げられた。かれは、空対空ミサイル・スパロウを発射してミグを撃墜するのに成功した。ところがすぐその後、このパイロットは指令どおりの目標に接近し、空対地ミサイルを発射した。」（「エーピエーション・ウィーク・アンド・スペース・テクノロジー」2月4日）

このように激しい戦闘行為に明け暮れた空母が、やがて「凱旋する」場所はアメリカではない。横須賀である。「母港」を許すことによって日本は外交をする余地もなく参戦している。

■戦闘部隊 4. 海兵隊-1

悲劇の沖縄から 第二の沖縄戦に出兵

在日米軍海兵隊が湾岸戦争に参加している実態は、空母戦闘団ほどは明らかではない。これまで得られている情報を整理すると次のようになる。

在日米海兵隊基地は岩国と沖縄にある。岩国に関しては、1月11日、基地当局が2飛行中隊が1990年暮れに中東に派遣されたことを明らかにした。その内訳は、第12海兵航空隊に属するAV8Bハリヤー飛行中隊（19機）、A 6 E イントルーダー飛行中隊（10機）である。しかし、人員数は明らかにされていない。岩国基地の兵員数は3

000人余であるが、航空機の機数から推定して約1000人と見積もることが出来る。これは、90年12月上旬に出された在日米海兵隊の増派計画（2月上旬までに2200～3940人）の一部として派遣されたものである。

在沖米軍調整官スタッツクポール少将は、開戦の前日、「沖縄から中東に派遣された人員は約8000人」と発言した。これには海兵隊以外の人員も含まれる。一方、アマコスト駐日大使は、1月23日、「在日米軍で湾岸に展開している数は、約7700人で少数の空軍兵が含まれるがほとんどが海兵隊員である」と沖縄タイムズに対して語っている。これらの数は矛盾しており、沖縄から何人位の海兵隊兵員が湾岸地域に派遣されているかははっきりしない。極めて大雑把に言えば、6000人以上の数と言えるであろう。

沖縄、岩国と合わせて、在日米海兵隊25,000人の30%近くが参戦していることになる。

在沖米海兵隊は大きくは第3海兵遠征軍に所属する。しかし、今回の湾岸派遣においては、この第3海兵遠征軍だけで大部隊（旅団）を編成するのではなく、ハワイや米本土から派兵される主力部隊に配属される形になる。沖縄からもさまざまな部隊が派遣されているが、派遣部隊名は必ずしもすべてが明らかではない。以下に各紙誌から拾った部隊名を掲げる。これらの部隊も多くの場合、一部分の派遣を意味している。カッコ内はキャンプ名である。

▼第3海兵師団第4海兵連隊（シュワープ）

歩兵部隊で1大隊が派遣されていると推定される。戦車、水陸両用車、砲兵、兵站部隊を擁する。

▼第3海兵師団第9海兵連隊（ハンセン）

歩兵部隊で2大隊が派遣されていると推定される。

▼第2海兵遠征軍第6海兵連隊第1大隊（シュワープ）

本来沖縄駐留の遠征軍ではないが（米本土東海岸ノースカロライナ州、バージニア州）、6カ月任期で沖縄に派遣されていた。

▼第3海兵師団第12海兵連隊（ズケラン）

第2砲兵大隊を含む2大隊が派遣されていると推定される。ハワイから派遣されている第1海兵遠征軍に合流する。155ミリ砲を装備。

▼第3海兵師団第1装甲攻撃大隊（シュワープ）

戦車、水陸両用車を装備。

▼第3海兵師団第3軽装甲歩兵大隊（シュワープ）

軽装甲戦闘車を装備。

▼第3海兵師団第3戦闘工兵大隊（ハンセン）

▼第3海兵師団第7通信大隊（ハンセン）

▼第3海兵師団第3偵察大隊（シュワープ）

▼第1海兵航空団第36海兵航空隊（フテンマ）

岩国の第12海兵航空隊に並ぶ部隊であるが、攻撃ヘリや、輸送機、空中給油機を擁し他の海兵地上部隊に割り当てられて部隊編成をする。

▼第3海兵任務支援隊第31分遣隊（牧港補給地区）

岩国の航空隊はサウジアラビアの地上航空基地から現在の空爆作戦に参加していると思われる。沖縄海兵隊の大部分は、今後予想される地上戦に投入されるであろう。地上戦の悲劇を誰よりもよく知っている沖縄から、別の地に第二の沖縄を生み出す兵が送り出されてしまったのだろうか。

●本号ではP C D S（太平洋軍備撤廃運動）、グリーンピース、宜野湾市職労、在日韓国研究所の協力を得ました。

●FAXサービス（料金、地域によります）、郵送（1号200円）をいたします。お申し込み下さい。